

五省

一 至誠に悔るなりしか
 一言に恥ぢるなりしか
 一 氣力に盡るなりしか
 一 努力に憾みなりしか
 一 不精に怠るなりしか

五省会ニュース

発行所
 医療法人財団五省会西能病院
 〒930 富山市五福1130
 TEL (0764) 41-2481(代)
 発行人 西能 正一郎

寒月の下の「去年今年」

年から年への重い流れ

兼久 文治

新春随想

師走と新春も子供のころは年をとるのも楽しみの一つで、奥ゆかしい季節の用語がいろいろある。そのなかで私は「去年今年(こそことし)」という言葉が好きである。

新年の季節で、年初めに当たって行く年くる年を見つめる語。流れゆく年に寄せるしみじみとした思いがこもっている。

今は満年齢だが昔は数え年で正月に年齢を一つ重ねるから余計にその思いが深かった。と、いつか

も子供のころは年をとるのにも楽しみの一つで、奥ゆかしい季節の用語がいろいろある。そのなかで私は「去年今年(こそことし)」という言葉が好きである。

新年の季節で、年初めに当たって行く年くる年を見つめる語。流れゆく年に寄せるしみじみとした思いがこもっている。

今は満年齢だが昔は数え年で正月に年齢を一つ重ねるから余計にその思いが深かった。と、いつか

新しい時代の視点

西能 正一郎

福祉そして健康へのサービスも

与えるから求められる医療に転換

皆様あけましておめでとうございます。年頭に記述する事柄としてはふさわしくないかも知れませんが、今の私の気持ちをお伝えするにどうしても避けて通れないので敢えて書かせていただきます。昨年は昭和天皇の崩御という、一世を撃つ出来事があり、時代は平成に替わりました。御在位六十三年余といふ最長の聖代が終焉を告げる、その瞬間に居合わせた、一種のドラマを見守ることが出来たことは仕合わせなことだと思っております。

六十三年間の歴史を振り返る機会にも恵まれ、私のように昭和の初めに生まれたものにとっては、自分の生涯の記録を見るように思われました。平成元年をふりかえってみますと、単に年号が書き替えられたというだけでなく、時代という舞台が静かに廻って、別の風景が現れつつあることを、さまざまな経験を経てはありますが、これからの、一般市民の皆様は、与えられる医療、

とだけはやめなさい」
 実は二十日ほど前のこと、歩兵から、特攻隊としての航空兵へ転科する希望者を募ったことがあった。隊長はその時「希望者は一歩前へ」といつた。その瞬間、私は母の言葉を思い出した。とたんに足がすくんで硬直し、一歩前へ出ることを拒んだ。希望者が意外に少なく隊長はひどく気嫌が悪かった。しかしそれ一度きりで、なぜかその話は立ち消えになった。

私はそのことが長く心にひっかかって、うつろつとしていた。自分がひどく卑怯で、勇気のない人間のように思えた。不寝番に立ちながら空を仰いで「己を売らないこと」とは何か、を考えた。

もうすぐ、明けて二十になるのにこんな無自覚な姿で戦いに望んでいいの

かーと私は慄慄(じくじ)たる思いだった。その時一歩前に出た同じ学徒兵の友がいた。本人はあとで「なんで希望したかわからない」といつた。その友はひどく大人しく消極的な性格だっただけに驚きだった。新春早々、阿蘇山で実弾訓練が実施された。キャンプで睡眠中の真夜中、その友は足で軽機を操作し胸を打ち抜いて自殺した。その夜、全員戸外に整列した時も寒月が空にあつた。

忘れ難い「去年今年」だが、心も行動もどちらに向うのか自分さえわからないうちの私たちの青春だった。

しんしんと去年や今年や月一つ(豆人)

(北日本新聞 天地人 執筆)

「おめでどう」の言葉が消えた。今年は反動的に賀状が増えると思われるが賀状の形式も昔と随分変わってきたようだ。今まで多かった元号が今年あたりからは西暦に変わってきそうだし、そうなる書き方も横書きが増えるかもしれない。昔は元旦に書いたものだが、一日に届ける年賀扱いが登場してから旧年中に出すようになった。その分天候や生き生きとした消息が書けず自然に形式的になってしまった。「よいお年を」というところで「おめでどう」というのだから気も抜けるのが当然。考えてみるとおかしな話だ。形式的にでも出さぬよりまし。沢山出さねばならぬ人が印刷になるのもやむを得まい。しかし、それだけに走り書きでもひとこと心のこもった添え書きがあるとうれしいものだ。石川啄木の賀状に「謹賀新年」とあり、横にこう書いてある。▼「この一年間、君が病中の僕にそそいでくれた友情が、友の少ない僕にとつてどれだけ貴重なものであったかは君も知っていただければと思う。僕はそれを年をとるまで忘れたくない。どうか今年はいい事が沢山あつてくれー君のためにもそして僕のためにも」貧困と失意の中の感謝の真情がよく伝わってくる。

あすなろ

昨年は天皇陛下のご病状悪化でなんとなく賀状を見合わせた人が多かった。賀状からも「謹賀新年」とか、「寿」とか、「おめでどう」の言葉が消えた。今年は反動的に賀状が増えると思われるが賀状の形式も昔と随分変わってきたようだ。今まで多かった元号が今年あたりからは西暦に変わってきそうだし、そうなる書き方も横書きが増えるかもしれない。昔は元旦に書いたものだが、一日に届ける年賀扱いが登場してから旧年中に出すようになった。その分天候や生き生きとした消息が書けず自然に形式的になってしまった。「よいお年を」というところで「おめでどう」というのだから気も抜けるのが当然。考えてみるとおかしな話だ。形式的にでも出さぬよりまし。沢山出さねばならぬ人が印刷になるのもやむを得まい。しかし、それだけに走り書きでもひとこと心のこもった添え書きがあるとうれしいものだ。石川啄木の賀状に「謹賀新年」とあり、横にこう書いてある。▼「この一年間、君が病中の僕にそそいでくれた友情が、友の少ない僕にとつてどれだけ貴重なものであったかは君も知っていただければと思う。僕はそれを年をとるまで忘れたくない。どうか今年はいい事が沢山あつてくれー君のためにもそして僕のためにも」貧困と失意の中の感謝の真情がよく伝わってくる。

平成二年

医療法人 財団五省会

理事長	西能正一郎
常務理事	林敏彦
理事	米田寿吉
理事	岸口繁
理事	中尾哲雄
理事	西能竑
理事	石川実
理事	笠田英二
理事	稲垣忠一
理事	井上塩六
理事	尾山征一郎
理事	大上紀美雄
理事	重松尚
理事	神沢幹夫
理事	西能孜
理事	坂本重一
理事	土田亮一
理事	豊田文一
理事	古沢富美
理事	堀政夫
理事	松井元太郎
理事	西能病院職員一同

